**恥の文化と罪の文化**

2019年5月22日 小林

目次

1 はじめに

2 「菊と刀」－恥の文化と罪の文化

　2.1 全体における位置づけ

　2.2 恥の文化と罪の文化

3 日本における恥の文化

　3.1恥と羞恥－作田啓一の見解

　3.2 恥と世間体－井上忠史の見解

　3.3 恥と意地－鑪幹八郎の見解

4 日本における罪の文化

　4.1柳田國男の指摘

　4.2副田義也の見解

　4.3五来重の見解

5 日本人の罪悪感

　5.1 犯罪心理学者の見解－共生的な罪悪感

　5.2 精神科医の見解－「見るなの禁止」

6 恥と罪－内面化と外部性

　6.1 日本人のしつけと内面化－長野晃子の見解

　6.2 罪の外部性と恥の内面化－森三樹三郎の見解

7 まとめ

　7.1 ベネディクトの見解について

　7.2 恥の文化と罪の文化

　7.3 コンプライアンスへの示唆

1. **はじめに**

ルース・ベネディクト著「菊と刀」[[1]](#footnote-1)は、多面的に日本の文化を論じているが、その中で特に有名なのは、欧米における罪の文化との対比で、日本は恥の文化であるがゆえに、日本人は人の目がないところでは恥を恐れる必要がないので、悪事への抑制がはたらきにくいとの見解である。このベネディクトの見解に触発されて、これまでに日本において恥の文化と罪の文化について多くの見解が提示されている。

恥の文化も罪の文化も、不正行為にたいする抑制になることから、いかにしてコンプライアンス確保を図るかについて重要な示唆を与えてくれるはずだ。この観点から、筆者は恥の文化と罪の文化について研究をすすめてきた。

筆者の研究は、これまでに発表された主要な見解をすべて網羅するものではないが、ひとまずは本稿において、恥の文化と罪の文化に関する諸見解を整理し、まとめておきたいと思う。

1. **「菊と刀」－恥の文化と罪の文化**
   1. **全体における位置づけ**

内容に立ち入る前に、全体における位置づけを見ておこう。

「菊と刀」は、恥の文化と罪の文化についてのみ論じているわけではない。それは、日本人の考え方や行動の特徴を明らかにして、その依って立つところの文化的背景を多くの資料にもとづいて分析したものである。したがって、そこでは、義理や人情、恩、忠、孝などについての記述も見えるし、家庭におけるしつけのし方やヒエラルキーを重視する社会構造などについても議論されている。このような「菊と刀」全四百ページ以上の中で、恥の文化と罪の文化について記述されている部分は、四ページに満たない。

「菊と刀」は第一章から第十三章まで十三の章に分かれているが、恥の文化と罪の文化は、第十章「徳のジレンマ」で論じられている。本章においては、日本人の道徳が相対的であること等が論じられているが、その第一パラグラフでは、日本人の戦時中の日本人は「忠」という徳目のもと最後の一人になるまで敵に抗戦することが要求されたが、1945年8月15日に天皇がラジオで降伏を告げたなら、「忠」の要求内容が変更され、日本人はこれまでとはうって変わって熱心に外来者に協力するようになったとのことが述べられている。

* 1. **恥の文化と罪の文化**

このような書き出しで始まった第十章「徳のジレンマ」は、いくつかの論点を経た後に、自重するということの意味について論じている。ベネディクトは、日本人の発言を紹介する。それは、「世間がうるさいから、自重せねばならない」「もし世間というものがなければ、自重しなくてもよいのだが」という二つの発言である。このような発言にもとづいてベネディクトは、以下のように言う。

「こういう表現は、自重が外面的強制力にもとづくことを述べた、極端な言い方である。正しい行動の内面的強制力を全然考慮の中に置いていない表現である。多くの国ぐにの通俗的な言いならわしと同じように、これらの言い方も事実を誇大に表現しているのであって、現に日本人は時によっては、自分の罪業の深さに対して、ピューリタンにくらべてもけっしてひけを取らないくらいに強烈な反応を示すことがある。とはいうものの、やはり右の極端な表現は、日本人がおよそどういうところに重点を置いているかということを正しく指摘している。すなわち、日本人は罪の重大さよりも恥の重大さに重きを置いているのである。」

ここで改行されて新しいパラグラフがはじまり、恥の文化と罪の文化についての議論が展開される。その議論の冒頭は、「異なるさまざまな文化を対象とする人類学の研究においては、二種類の文化を区別することが重要である。一方は、恥を強力な支えとしている文化。他方は、罪を強力な支えとしている文化である。」とベネディクトはかなり断定的に、多くの民族が創り出した多様な文化であってもそれらの文化は、二つに大別することが可能だと言う。

このように文化についての大原則を提示したうえで、ベネディクトは米国は罪の文化で、日本は恥の文化だという。そして、それぞれの文化の特徴を二点指摘する。一つ目は、罪の文化における懺悔である。懺悔すれば罪悪感から解放され心の安らぎがもたらされるが、恥の文化においてはこのような懺悔に類したことはおこなわない。なぜなら、悪い行ないが「世人の前に露顕」しない限り、思いわずらう必要はないからである。二つ目は、罪の文化においては内面化された罪の意識によって良いおこないが引き出されるのにたいし、恥の文化においては人前で嘲笑されるかもしれない、あるいは拒否されるかもしれないという外部からの強制力によって良いおこないが引き出される。すなわち、罪の文化においては罪悪感が倫理の基礎であり、恥の文化においては恥にともなう痛恨の念が倫理における基礎となっている。

ベネディクトは、米国は罪の文化だとは言うものの、米国人も「なにかへまなことをしでかした時に、恥辱感にさいなまれることがありうる」と言い、その例として、「時と場合にふさわしい服装をしなかったことや、なにか言いそこないをしたことで、非常に煩悶することがある」と言う。

ベネディクトは、米国における罪の文化の現状について、「・・・・・アメリカでは、恥が次第に重みを加えてきつつあり、罪は前ほどにははなはだしく感じられないようになってきている。アメリカではこのことは道徳の弛緩と解されている。この解釈には多分の真理が含まれている・・・・・」と言い、米国における恥の重みの増加と道徳の弛緩を指摘してもいる。

恥の文化と罪の文化に関する議論の最後では、日本における恥の文化について次のように結論づける。

「日本人の生活において恥が最高の地位を占めているということは、・・・・・各人が自己の行動に対する世評に気をくばるということを意味する。彼はただ他人がどういう判断を下すであろうか、ということを推測しさえすればよいのであって、その他人の判断を基準にして自己の行動の方針を定める。」

恥の文化においては、他人の判断を基準にしてどのように行動すべきかを決することになる。絶対的な判断基準があるわけではなく、他人の判断という他者依存的な基準があるだけなのである。

1. **日本における恥の文化**

上記のようなベネディクトの見解に触発されて、日本人学者から恥の文化をさらに掘り下げて解明しようとする論考が発表されている。以下では、作田啓一および井上忠史、鑪幹八郎の見解を紹介する。

* 1. **恥と羞恥－作田啓一の見解[[2]](#footnote-2)**
     1. **公恥と私恥**

作田は、ベネディクトの「日本は恥の文化」との見解にたいし、単純すぎる見かたであると批判を加えている。

まず、ベネディクトが言うところの「恥」は、公開の場で＝人の目があるところであざけりや拒否を受けたことで起きる感情である。作田はこの恥の感情を「公恥」と名づけている。これにたいして、作田はあざけりや拒否がなくても、単なる他人からの注視だけで人は羞恥を感じることがあるという。作田はこれを「私恥」と名づけている。たとえば、医者と患者の関係で、医者が患者を患者としてではなく個人として注視した場合、患者は羞恥を感じるのではないだろうか。つまり、普遍的存在として見られるべきときに個体として見られると羞恥を感じるのである。その逆も同様である。たとえば、恋人（個体）として見つめ合っている最中に、客観的な対象として相手に観察されると羞恥を感じるのであろう。このように普遍化と固体化のズレがあるときに、注視されると羞恥が生じる。ベネディクトはこの私恥を考慮していないと作田は批判する。

* + 1. **恥の内面化と羞恥**

つぎに作田は、ベネディクトの恥の定義は、恥の内面化を考慮していないという。たとえば、軽蔑に値する行為であることがしつけや教育によって子どもの心に植え付けられた場合（公共の場でゴミをすててはいけない等々）、注視がなくてもその行為をひとり恥じるようになる。

さらに作田は、欧米人にも公恥の感情は日本人と同様にあるのではないかと言う。公開の場であざけりや拒否を受けた場合、日本人は「公恥」を感じるが、この恥の感情は、日本人のみがことさら強く感じるわけではなく、欧米人も同様に感じるのではないだろうか。公恥は欧米人にとっても強い規制力をもっているはずだ。

そうすると日本人に特徴的なのは、私恥を強く感じることではないかと作田はいう。なぜならば、柳田國男が言うには、日本人ははにかむ傾向が強く、はにかみへの強い関心から「にらめっこ」という遊びができた。つまり、日本人はそもそも他人の注視にたいして警戒的であり、そのうえで普遍化と固体化のズレが生じていれば他人の注視にたいしてより強い羞恥を感じるのであろう。

したがって、作田によれば、日本は恥の文化と言うべきではなく、羞恥の文化と言うべきであるとのことである。

* 1. **恥と世間体－井上忠史の見解[[3]](#footnote-3)**
     1. **恥と世間体**

井上は、世間体を切り口に恥の文化を解き明かそうとする。

日本人は、「世間」という言葉で恥を表現する。たとえば、「世間体が悪い」「世間の笑いものになる」などである。だから日本人は、世間や世間体を気にする。これはつまり、世間が言動の基準になっているということである。それでは、「世間」とは何なのだろうか。

まず、農民の世間を考えると、それはムラ社会であり、その構成員は親族血縁・昔なじみである。この中では世間体を気にする必要はなく、恥は農民の感情ではないことが分かる。一方、武士は名を惜しみ面目を重んじる。武士道からくる体面意識というものである。これは武士特有のものであり、恥は武士の感情である。これが江戸期以降、農民や町人に浸透した。

武士の体面意識には、主従という上下関係があり、その世間は主君を頂点とする家臣団である。一方、農民・町人の世間は仲間とのヨコの関係である。それでは、ヨコの関係はどこまで伸びて、どこまでが世間なのだろうか。そのカギは、ウチとソトの概念である。

中根千枝によれば、日本人は「場」を共有する集団への帰属意識が強く、属性を共有する集団への帰属意識は弱い。「場」とは、会社や家庭など集団が集まる一定の場所である。日本人は場の集団をウチと意識し（家庭をウチといい、会社をウチの会社というなど）、その仲間どうし密度の高い関係を築くことになる。たとえば、職場の仲間でゴルフをやり、飲み会をする。このような人と人のつながりは、「ミウチ・ナカマ」と言われる集団である。これを第一カテゴリーとすれば、第二カテゴリーは、第一カテゴリーを取り巻く形で「知り合い」と言う集団がある。第三カテゴリーは、さらにそのソトにあり、これは「ヨソの人」であり、これが「世間」である。

世間の目は顔に集中するので、恥をかくと顔、つまり面子を失う。「面子を失う」は個人に使われ、「外聞が悪い」は家・ムラ・会・党などの集団に使われる。この感情が恥であり、日本の文化になっている。

* + 1. **ベネディクトへの批判**

さて、ルース・ベネディクトのいう日本は恥の文化という主張にたいしては、批判が多い。彼女は世界の文化を恥と罪で単純に二分化し、罪の文化を上位に置く意識が見える。この考えを補強したのがマックス・ウェーバー言うところの「プロテスタントの倫理」、つまり信仰に根ざした倫理観である。

罪は、それを犯したとき内面的制裁がはたらき、良心の呵責を感じることになる。したがって、人の目がなくても自制心がはたらく。その一方で、恥は外面的制裁がはたらき、他者に笑われることになる。このように、罪には内面的強制力があり、恥には外面的強制力があるということである。

しかし、罪には罰が与えられ、これは外的制裁である。罰はしつけ・教育で心に植え付けられてはじめて内面化する。その一方で、恥は世間という外的規範に反しない言動をとらせることになるが、日本ではこの外的規範をしつけ・教育で心に植え付けて内面化している。ベネディクトは、しつけ・教育による内面化ということに気づいていなかった。

さらに彼女は羞恥心に気づかなかった。これは上記のとおり作田啓一が指摘したことだが、日本は恥の文化ではなく、羞恥の文化であるようだ。

* + 1. **恥と羞恥と罪**

以上の議論を踏まえ、井上は以下のように恥・羞恥の感情と罪の感情を説明する。

まず、恥は二つに分類される。一つは、「公恥」であり、これは行為主体の自我理想とくらべ自己を劣位者と認識し、他者のまなざしを介して所属集団から孤立していると思ったときに感じる恥の意識である。「公恥」に対し、「私恥」とは、自我理想（自己の理想像）とくらべ現実の自己が劣位者と認識されたとき、あたかも他者が自己を見つめるかのごとく見つめられると感じることにより、一人ひそかに感じる恥の意識である。次に、「羞恥」とは、自己の所属集団（個体／普遍）と準拠集団（普遍／個体）とのあいだに認知志向のズレが生じ、他者のまなざしを介してそのズレが意識されたときに感じる恥じらいである。

「罪」は二つに分類され、一つは、「普遍的罪」であり、これは自己の心の中の別の自分が自己の所属集団（会社や社会など）からの逸脱者として認識されたときに感じる罪の意識である（たとえば、殺人を犯せば社会からの逸脱者と認識される）。二つ目は、「個別的罪」であり、自己の心の中の別の自分がやってはいけない事をやったと認識したときに感じる罪の意識である（たとえば、親との約束を破った場合）。

* + 1. **世間体の今日的な意義**

井上は、世間体の今日的な意義について論じている。

世間体は、日本人の意思決定のあり方に影響を与えている。つまり、他者のまなざしを伺いながら他者の期待に同調していく過程の中で、自己の意思をしだいに固めていこうとする[[4]](#footnote-4)。欧米の個人主義では自分の意見があって、そのうえで他者を説得する。方向性が逆である。

世間体を気にすることを古い習慣だと否定すると、日本人のように自我が確立されていない場合には、他者に見られていなければ何をやってもよいと考える傾向になりやすい。

山崎正和（関西大学・大阪大学教授）の見解によれば、日本の伝統芸術は「社交の芸術」と言われている。たとえば、万葉の和歌は貴族が宴席で歌を競い合うという社交芸であり、句会は町人等が集まって俳句を競い合う社交芸である。日本画には他者が賛（お褒めの言葉）を書き入れる習慣がある。つまり、他人の評価を気にする芸術と言うことができる。絶対的な美を追求するのではなく、他人の評価を気にする芸術なのである。

これは、世阿弥（1363-1443年）のいう「離見の見」という能における奥義に通じる。離見とは観客から演者を見たときの見え方であり、この観客からの見え方を演者自身が見なければいけない、ということである。つまり、自己の演技を他者の目を介して客観視することだ。このように、他者の目を気にする文化は、単に他者に迎合する文化ではなく、芸術においてすばらしいものを創り出したと言えるであろう。

* 1. **恥と意地－鑪幹八郎の見解[[5]](#footnote-5)**
     1. **恥と意地**

鑪は、恥と意地は表裏の関係にあるとして、意地を切り口にして恥を解明しようとする。

日本人は、恥をかかないように振る舞うとともに、他人に恥をかかせないように振る舞うものである。これが、人と人とのあいだの指導原理になっている。

さらに、恥をかいたとき、あるいは恥をかかないために、意地をはる・我慢するということがある。つまり、「武士は食わねど高楊枝」、武士は十分に食事ができなくても意地をはって満腹であるかのように高楊枝（ゆうゆうと食後に使う楊枝のこと）を使うのである。

もし、恥をかかされたら、見返してやろうと我慢して頑張る。これも意地である。恥と意地は表裏の関係にあり、日本は恥の文化と同時に意地の文化でもある。

* + 1. **恥の意識の誕生と成長**

恥の意識はどのように誕生し、どのように成長していくのだろうか。ベネディクトは、この点について何も言っていない。

人格の発達・形成には、母子関係が大切である。幼児期には、信頼感や自律性・自発性が形成される。母親から離れようとして、自分らしさが芽ばえる。この時期には、母親の要求と幼児の要求がぶつかり合う。そこで、しつけがおこなわれる。つまり、母親等が一つの枠にはめ込むということ、あるいは母親等の思いに従わせるということになる。

今まで好きにやってきた幼児にとって、外からの心理的な圧力を受け入れることは、劇的な変化である。これを受け入れるためには、母親等にたいして信頼感がなければならない。信頼感があるから不愉快な心理的圧力を受け入れることができる。

しつけは、外から課される制限を自分の心の中に内在化させることである。内在化されれば、外からの制限がなくても社会的に受け入れられる行動ができるようになる。これが自律性というものである。この内在化された制限に背いたとき、人は自分の行為を恥じるのである。

幼児期には、どうしても内在化が不十分である。そうすると外的な力が必要であり、母親等がこの役割を担う。つまり、母親等を自分の代理自我とし、この代理自我から与えられる制限を受け入れるための心の体制を作り上げるのである。たとえば、母親が電車内でさわぐ我が子に「隣のオジサンに怒られるから静かにしなさい」と注意したとする。これは、母親自身しつけが内在化されておらず、かつ我が子にもしつけを内在化させようと努力していないということである。

* + 1. **恥と対人関係の受け身性**

日本人は、周囲の価値判断に自分を合わせる傾向が強い。つまり、対人関係の受け身性である。われわれは、「先生からしかられる」「友達から笑われる」等々だから「してはいけない」という外的な制限をしばしば口にするのではないだろうか。

日本人の恥の感情は、この対人関係の受け身性から発生している。すなわち、周囲の意向を優先し自己の体面を維持するため、自己の意向を抑える。その結果、周囲の意向に支配される。そして、そのように支配された自己は、抑制された自己の意向を周囲が受け止めてくれることを期待する。もし、この期待がかなわないと怒りが生まれるが、これを外には出さないで抑圧する。予期に反してこの怒りの抑圧がはずれて対人関係のルールからはずれた行動が発現し、あるいは隠された自我内容が発現する。このとき、強い恥の感覚が発生するのである。

* + 1. **意地と日本人の美意識**

鑪は、意地を四つに分類し、意地の中に日本人の美意識を見出している。

分類の一つ目は、こだわりと怒りの意地である。相手への怒りから意地悪をし続ける意地である。たとえば、米国映画「ローズ家の戦争」[[6]](#footnote-6)において描かれている夫婦間で意地悪をし続ける意地である。夫婦間のいさかいがエスカレートし、最後に事故で夫婦ともに死ぬが、死の直前に瀕死の夫が伸ばしてきた手を瀕死の妻が邪険に振り払い拒絶する。ここに、意地悪をし続ける意地が表現されている。

二つ目は、名誉を重んじる意地である。自己等の名誉を守るため、名誉を傷つけた相手に戦いを挑む意地である。たとえば、森鴎外の「阿部一族」に出てくる阿部家の当主・弥一右衛門、その長男および次男による藩にたいする名誉回復のための抵抗は、この種の意地から出たものである。弥一右衛門は藩主の許可がなく殉死することができなかったが、他の側近たちは許可を得て殉死した。弥一右衛門に許可が与えられなかったのは、藩主が謹厳実直な彼をけむたく思っていたからであった。その後、「いのちを惜しんだ」との陰口を聞いた弥一右衛門は、みごと切腹して果てた。しかし、藩はこれを先代藩主の命令違反ととらえ、阿部家の家格を降格する処分を下した。これを理不尽と考えた長男は、先代藩主の一周忌法要の場で髷を切り落とす挙に出た。藩はこれを重大な非礼行為として、長男を武士には適用されない縛り首という刑に処した。次男はこれに怒り、一族とともに阿部家にたてこもり反旗をひるがえし、最後は一族全滅となった。阿部家の名誉を守るための意地である。

三つ目は、名誉回復のための意地である。しきたりや慣習で自己や親などの名誉回復が求められている場合に、それに従って行動する意地である。たとえば、「曽我兄弟の仇討ち」で見せた[曾我祐成](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%BE%E6%88%91%E7%A5%90%E6%88%90)と[時致](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%BE%E6%88%91%E6%99%82%E8%87%B4)（ときむね）兄弟の意地である。工藤佑経とその叔父・伊東祐親は所領争いでいがみ合っていたが、伊東祐親が狩りに出たおりをとらえて、工藤佑経は刺客をはなってこれを殺そうとした。ところが、刺客の射た矢は伊東祐親をそれて、その嫡男・祐康を殺してしまった。未亡人となった祐康の妻はその後、幼い子ども二人をつれて曽我祐信と再婚した。しかしその後、曽我家は没落し、幼い兄弟二人はつらい日々を過ごした。二人の元服のときには、遠縁にあたる北条時政を烏帽子親にし、それぞれ曽我祐成、曽我[時致](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%BE%E6%88%91%E6%99%82%E8%87%B4)と名のった。源頼朝の御家人となった父の仇・工藤佑経は、頼朝にともなって富士山麓での狩りに出かけたが、そこで野営する工藤佑経の寝所に祐成・[時致](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%BE%E6%88%91%E6%99%82%E8%87%B4)兄弟は忍び入り、みごと本懐を遂げた。しかし、多勢に無勢、兄は討ち死にし、弟は捕らえられた。頼朝は助命を考えたが、工藤佑経の遺児・犬房丸の言を入れて弟は斬首された。

四つ目は、自尊心の傷つきからくる意地である。恥をかかされたのでその償いを求めて意地をとおし、恥をそそぐ行為である。たとえば、「忠臣蔵」の仇討ちである。浅野内匠頭は、吉良上野介の意地悪に何度も体面を失った。堪忍袋の緒が切れて、松の廊下で刃傷におよんだ内匠頭であったが、討ち果たすことはできず、捕らえられ、幕府のお裁きは切腹となった。喧嘩両成敗のルールにもかかわらず、上野介にはお咎めなしとなり、浅野家はお取りつぶしとなった。お家再興の嘆願も聞き入れられなかった。これでは亡き殿の無念は晴らせないと、家老・大石内蔵助に率いられた赤穂浪士は内匠頭切腹から一年九ヶ月ほど後に本所・吉良邸に討ち入り、上野介を討ち取った。意地を貫いて主君の恥をそそいだのであった。

鑪によれば、二つ目から四つ目までの意地は、日本人の美意識になっているとのことである。

1. **日本における罪の文化**

ベネディクトの日本は恥の文化であるとの主張にたいして、日本にも罪の文化はあるという反論が提示されている。ここでは、民俗学者・柳田國男および宗教学者・五来重そして社会学者・副田義也の見解を以下に掲げる。

* 1. **柳田國男の指摘**

柳田國男（1875-1962年）は、以下のように言う[[7]](#footnote-7)。

日本において、仏教の罪業観は広く徹底されている。「親をにらめばヒラメになる」「食べてすぐ寝ると牛になる」など後生のために現世の悪行を戒めることわざが多い。仏教の教理が日本人の倫理とむすびついて、罪の報いを恐れさせるようになった。日本人のあきらめの良さは、この世の苦しみを前世の悪行に基づくものと解しているからであり、良き来世のため今生の行為を慎もうとしたのである。これが日本人の倫理感になっている。

このように、日本にも罪の文化がある。日本人は昔から罪を意識している。日常使われる言葉に「罪」がよく使われることからも分かる。たとえば、「罪つくりな」「罪なことをする」「罪のない顔」などである。

日本人は、仏教の影響として罪の報いを恐れることを教えてきた。これは輪廻転生の教理から来ているが、輪廻転生の考え方は日本固有の信仰のなかにもあった。霊魂の生まれかわりは、古くから信じられていたので、輪廻転生という仏教の考え方は日本に定着した。

このように、仏教からの影響により、日本人は昔から罪を意識して、言動を慎みながら生活しているのである。

* 1. **副田義也の見解**
     1. **罪の文化－法然と親鸞**

副田は、鈴木大拙（1870-1966年）の著作「日本的霊性」に依拠して、日本における罪の文化は、以下のような伝承に表れていると説明している[[8]](#footnote-8)。その伝承は、いずれも浄土宗の開祖・法然（1133-1212年）が、罪の意識に悩む人々から直接聞いた話である。

一つは、播磨の国高砂の浦で年老いた漁師夫婦から聞いた話である。その漁師夫婦は、若い頃から魚の命を奪う仕事をしてきたわたしたちは、どうしたら地獄に落ちるのをまぬがれることができるのかと法然に泣いて助けを求めたのであった。二つ目は、播磨の国室の泊では、遊女は前世の罪がたたって遊女という境遇に落ちたのであろうが、どのような罪があったのでしょうかと法然に問うたのであった。三つ目は、源氏に捕らえられた平重衡は、自分が犯した南都焼き討ち（1181年）やその他の罪のため死後に苦果はまぬがれない、どうしたらよいのかと法然に訴えたのであった。いずれの場合においても、法然の回答は、南無阿弥陀仏と唱えなさい、そうすれば阿弥陀如来の力で浄土に往生することができると説くのであった。

これらの伝承は今から八百年以上も前のことではあるが、罪の意識に悩む人々が切実に宗教に救いを求めていたことが分かる。

法然が説いた浄土思想の罪と救いの教義は、その弟子・親鸞（1173-1263年）に受け継がれ、いっそう深められた。親鸞は、「南無阿弥陀仏」の念仏は極楽往生するための手段ではなく、「南無阿弥陀仏」と念仏すること自体が極楽往生だと説いた。「念仏即往生、往生即念仏」である。

親鸞の信仰の根っこには、出家の身でありながら煩悩に負けて結婚してしまったという強烈な罪の意識があったのであろう。「念仏即往生、往生即念仏」の思想の背景には、この強烈な罪の意識があったように思われる。

* + 1. **罪の文化－浅原才市の俗謡**

副田は、さらに「日本的霊性」に依拠して、日本に罪の文化があることを明らかにする。

「日本的霊性」の第四篇「妙好人」には、浅原才市という浄土真宗の信者が作った俗謡[[9]](#footnote-9)が何編か掲載されている。彼が作った俗謡には、罪の意識が強烈に表されている。ちなみに、浅原才市は、島根県の漁村に生まれ、船大工などをして昭和八年に八十三歳でなくなった。以下に俗謡一編の前半部分のみ掲げる[[10]](#footnote-10)。

あさましや、さいちの心は、あさましや

妄念がいちどに出るぞ、にがにがしい。

悪の混ざった火がもえる

悪の混ざった波がたつ、あさましや。

愚癡（ぐち）の混ざった火がもえる、

邪慳もの、あさましや、

とどめられんか、さいちが心、

くよくよと起る心を、訪ね見れば、

天に乗り越すさいちの心

（以下省略）

* + 1. **日本の倫理規範の三層構造**

副田は日本にも罪の文化があると言うが、それと同時に恥の文化もあると言う。そのうえで副田は、仮説として日本人の倫理規範について三層構造をなしているのではないかとの見解を示している。三層構造とは、表層に恥の文化があり、中層に罪の文化があり、そして深層に穢れの文化があるというものである。「それらは同時的に存立し、必要におうじて使いわけられている」と言う。

深層の穢れの文化は、神道に由来する。穢れは禁忌であるが、祓うことによって清められる。中層の罪の文化は、仏教に由来する。鎌倉時代に浄土宗や禅宗などの日本的仏教が形成され、農民や武士がそこから罪の文化を受容した。表層の恥の文化は、武士階級が職業戦士の倫理として形成したものである。そこでは恥は是が非でも回避されるべきものであり、名誉が求められる。恥の文化は儒教によって体系化され、町人階級、農民階級にも浸透していった。

* 1. **五来重の見解**

五来は、彼の著作「日本仏教と庶民信仰」[[11]](#footnote-11)において日本にも罪の文化があることを、いくつかの事例をあげて明らかにしている。

* + 1. **ポルトガル宣教師の目撃談**

日本人の罪の意識をものがたる出来事が、天正五年（1577年）、ポルトガルの宣教師が書いた「耶蘇会士の日本通信」に彼の目撃談として記録されている。それは、無名の山伏が天正年間（1573-93年）のころ、母親殺しの罪ほろぼしのため小舟で博多沖に出て、入水自殺をしたという記録である。この山伏は母親を殺した罪の懺悔のため山伏になり、数年間にわたり諸国を巡り、言語に絶する苦行をおこなった。徹夜断食祈祷の七日間はたえず起立して徹夜し、冬の寒気のもっとも厳しいときには、同行者が水をかけるなか博多の町を走った。最後の苦行は、五昼夜のあいだ博多を流れる川の中で起立したまま不眠不動の苦行をした。この後、山伏は小舟で博多沖へ漕ぎ出していった。この小舟には、二人の老人も乗っていた。山伏の苦行に信心を刺激され一緒に死のうと同乗したのであった。山伏は袖や懐に石を入れ、小舟には薪を積んだ。沖に出て薪に火をつけ、入水した。

この宣教師は、異教徒のこの日本人のおこないは、キリスト教徒よりもすばらしいと称賛している。

* + 1. **日本における滅罪死**

大宝律令（701年）における僧尼令は「焚身捨身」、つまり僧侶による焼身自殺・投身自殺を禁じているが、これは当時、僧侶による滅罪のための自殺が多かったことを示すものである。出羽三山の湯殿山にある即身仏は、弘法大師空海の教えにならって衆生済度の誓願をのこしミイラになったものである。

江戸時代、鉄門海上人は青年時代に武士を殺した罪の滅罪のため、空海没年と同じ六十二歳で即身仏（ミイラ）になったが（1829年）、生前には眼病平癒を祈願して、衆生の眼病の苦を身代わりとなって受けるため、自己の左眼をくりぬいた。この即身仏は、山形県鶴岡市の注連寺（真言宗）にいまも安置されている。明治十七年には、修験道の行者・林実利(じつかが)は、座禅を組んだまま和歌山県・那智の滝に投身自殺した（享年四十二歳）。日本の宗教史上、最後の捨身の例である。なお、那智の滝近くの彼の墓は、いまも多くの信者の信仰を集めている。日本古来の修験道は、滅罪のための捨身を最高の名誉としたのである。

このような滅罪死の事例は、日本にも罪の文化があることを示している。

* + 1. **巡礼と遍路**

西国・坂東・秩父の百観音巡礼や四国八十八か所巡礼など多くの遍路の道がいまも残っているが、これは日本人の罪に意識の強さをものがたるものである。巡礼の旅に向かう民衆の心には、懺悔滅罪の意識があったのである。

宗教とは放浪である。古来日本の神は、巫女や聖に憑依して所々を巡った。これを遊幸という。四国八十八か所巡りは空海の遊幸の跡をたどる信仰からはじまり、因果応報にもとづく罪業を滅罪する一つの方法として庶民に浸透していった。

1. **日本人の罪悪感**

以上において、日本にも罪の文化があることが分ったが、次は日本人の罪悪感について見ていこう。

罪悪感とは、自分が悪いことをしてしまったと思う気持ちである。日本に罪の文化があるのであれば、その罪の文化において日本人が感じる罪悪感、すなわち罪の意識とはどのようなものなのであろうか。以下において、犯罪心理学者と精神科医の見解を紹介する。

* 1. **犯罪心理学者の見解－共生的な罪悪感**

まず、犯罪心理学者・新田健一の見解を彼の著書「組織とエリートたちの犯罪」にもとづいて紹介しよう。

* + 1. **自我の二重構造**

罪悪感を感じるためには、「見る自己」と「見られる自己」の存在が必要である。「見られる自己」は生理的・社会的発達過程をへて成立し、「見る自己」は社会文化的に形成される。つまり、自我の二重構造である。これを「共生的自我構造」という。

和辻哲郎も自我の二重構造を認め、「外に出ている」自我（見られる自我）は、社会文化的環境要因つまり風土に規定されると言う。そして二重の自我をもつところの人間は、「人」であると同時に、「人びとの結合・共同体としての社会」であり、「家」「狭い地域」の人間関係が文化的特殊形態としての日本人の精神構造の特徴を規定しているとのことである。

土居健郎の言う「甘えの構造」も、新田の言う「共生的自我構造」も、日本の社会文化的環境から形成されてきたが、人間関係を身内と外（ウチとソト）に分けて、身内（ウチ）の中では気をゆるし合い・もたれ合い・かばい合って身内どうしの結合を強化し、外（ソト）に対しては対立し・無関心でいる生活環境の中では、「見る自己」＝主体的自我は、身内（ウチ）の中に埋没してしまう。したがって、日本では主体的自我は育ちにくい。このような自我構造をもつ日本人は、自己の違法行為の結果が身内（家族・会社・学校・ご近所）の評価・感情にどのように影響するかが最大の関心事になる。

仏教の影響として、自我が育たちにくい日本社会では、無我の境地が理想とされる精神風土を生んだ。和辻哲郎によれば、この精神風土の中で、日本人の倫理は、「関係性の倫理」として成り立っている。なぜなら、自我は個として存在しておらず（すなわち、無我）、自我は他者との関係の中にのみ存在することになる。ここに「関係性の倫理」が発生し、これは、家族関係から地域社会へ、そして国家との関係で発展していくのである。

* + 1. **共生的罪悪感**

日本人は、「和」を乱すことに罪悪感を感じる。「和」とは他者との関係であり、これを乱すことに罪悪感を感じるのである。

日本人は、「西欧的な法秩序」と「和の秩序」の二重規範性を有しており、これは犯人による犯行の正当化理由に影響している。「悪い事とは知りながらたのまれたからには断れなかった」あるいは「恩があって裏切れなかった」などが犯行の正当化理由として言われる。周囲の反応も「事情を知れば同情できる」とか「私にとても親切だったあの人がそんな悪い事をするはずがない」など、義理と人情の連帯感が合理的判断に優先してしまう。

これは、内部告発に対する周囲の反応に顕著に現れる。つまり「裏切り行為だ」あるいは「和を乱す背信行為だ」と批判される。法的に正しい行為も、義理と人情に照らして「やってはならないこと」と判断されてしまうのである。

このように日本人の罪悪感は、共生的罪悪感といえる。共生的とは、共に生きることである。たとえば、日本の受刑者がよくいう反省・謝罪の言葉は、「こんなことをして親兄弟に申し訳ない」あるいは「母親にかわいそうな思いをさせてしまった」などである。つまり、親兄弟との共生的な罪悪感、すなわち親兄弟とともに共有する罪悪感なのである。この反省・謝罪の言葉を聞いたヨーロッパの刑務官は、「謝罪は被害者にすべきで親には関係ない」と言ったとのことである。個人が確立しているヨーロッパの人たちに、この日本的な罪悪感は理解しがたいのであろう。

このように自我が弱い日本人は、自己の心の痛みを身内の情緒的な反応に転化させ、親兄弟に許してもらうことを期待するという甘えを示す。この甘えは、企業・官公庁などの組織においても見られる。不祥事を行なった社員・公務員は、「会社・公官庁に迷惑をかけて申し訳ない」などと言い、謝罪は身内に向けられる。つまり、関心がウチにだけ向き、ソトにたいしては関心が希薄化しているのである。

* 1. **精神科医の見解－北山修の「見るなの禁止」**

次に、罪悪感に関する精神科医・北山修の見解[[12]](#footnote-12)を見ていこう。彼は「見るなの禁止」という概念を提唱し、これによって日本人の深層心理における罪悪感を明らかにしようとした。

* + 1. **「見るなの禁止」**

われわれは、法律や社会ルールに反する行動をとったとき、罪悪感を感じる。それでは、法律や社会ルールやムラの掟も明確に存在していなかった原始時代において、日本人はどのような場合に罪悪感を感じたのだろうか。言い換えれば、もっともプリミティブな罪悪感とは、どのような場合に感じるのであろうか。

北山はこの問題にたいして、日本の神話や昔話を研究することから、「見るなの禁止」という概念を提唱した。「見るなの禁止」とは、たとえば「イザナキ・イザナミ神話」や「鶴の恩返し」に出てくる女性の「見ないでください」との禁止をいう。その夫はこの禁止にもかかわらずのぞき見したため、女性の正体、すなわち腐乱死体や鶴であることを知ってしまう。正体をあばかれた女性は、それを恥じて夫のもとから去って行ってしまう。

ここから北山は、ある人の善・悪や醜・美などの二面性をあばいてしまったときの「すまない」という感情が日本人の罪悪感の原始的な感情だと説明した。たとえば、夫のイザナキが愛する妻イザナミの腐乱死体という醜い姿をあばいてしまったときに感じた「すまない」という感情であり、「鶴の恩返し」では自分の羽を抜いて布を織っていた血みどろの鶴という正体をあばいてしまったときに感じた「すまない」という感情である。

* + 1. **ケガレとミソギ**

北山は、イザナキ・イザナミ神話は本当にあったことではないかと言う。すなわち、(1)イザナミの死因である出産死は、古代においてはしばしば起きたはずである。そして、(2)イザナミが腐乱死体になったのは、殯(もがり)の風習から通常のことと考えられる。殯とは、死を確認するため一定期間遺体を放置しておくことであり、実際、そこに「見るなの禁止」があったのではないだろうか。

イザナキはイザナミの腐乱死体を見たあと、鼻孔を洗って腐臭を洗い流したが、これはケガレをミソギで消そうとした行為である。ここに日本人の罪の意識が表れている。罪はケガレであり、ケガレは「澄まない」モノ＝濁ったモノであり、これを「澄まそう」とするのがミソギである。だから、日本人が罪悪感を感じたときは、「澄まない」との思いが心に生じ、「すみません」と謝罪すると考えられる。

* + 1. **何かを隠している存在**

人は誰でも二面性を持っていて、マイナスの部分を隠しながら生きているのではないだろうか。人間とは、そういう存在ではないだろうか。北山は、これは「わたくし」の語源から言えるのではないかと言う。「わたくし」の語源は、「ワガタメニカクシ」（我爲隠）、あるいは「ワタカクシ」（曲隠・渡隠）が語源との説がある。なお、「曲」は曲者、曲事のように「悪い」や「違法」の意味があり、悪い事や違法な事を隠している存在を「わたくし」と言ったのである。「渡隠」は「何かを隠して世を渡る」の意味であり、そのようにして生きていく存在を「わたくし」と言ったのである。

日本人は、人のことを「何かを隠している存在」と認識しているのではないだろうか。その隠しているモノを見てはいけないとの共通理解があり（つまり「見るなの禁止」があり）、その禁を犯して隠しているモノを見た場合、人は「すまない」という感情、すなわち罪悪感を感じるのではないだろうか。

1. **恥と罪－内面化と外部性**

ベネディクトは、罪の文化においては内面化された罪の意識によって良いおこないが引き出されるのにたいし、恥の文化においては人前で嘲笑されるかもしれない、あるいは拒否されるかもしれないという外部からの強制力によって良いおこないが引き出されると述べている。罪の文化は心の中の罪の意識が悪事を思い止まらせ、恥の文化は外部からの嘲笑や拒否が悪事を思い止まらせる。したがって、人の目がないところでも、罪の文化では悪事への抑制が働くが、恥の文化ではこれが働きにくいということになる。

この罪の意識の内部性と恥の意識の外部性にたいして、反論が提示されている。以下において、長野晃子と森三樹三郎の見解を紹介する。

* 1. **日本人のしつけと内面化－長野晃子の見解**
     1. **犯罪率**

長野晃子[[13]](#footnote-13)は、日本人は人の目がないところでは悪事にはしる傾向があるとのベネディクトの見解は、画一的なものの見かたであり、間違っていると言う。なぜなら、もしベネディクトの見解が正しいとすると、日本での犯罪率が諸外国に比べ低いことを説明できないからである。犯罪率はさまざまな要因に影響されるが、これらを考慮しても日本の犯罪率の低さは際立っている。長野が引用するデータはやや古いので、最近の犯罪率のデータを以下に掲載する。

これを見ると、たしかに長野の見解にはうなづけるところがある。犯罪は、基本的には人の目がないところでおこなわれるものであるが、犯罪率のデータは、日本人は人の目がないところでおこなわれる悪事についても抑制が働いていることを示しているように思われる。

日本と諸外国における2015年の犯罪率＝人口10万人あたりの件数（平成三十年度版「犯罪白書」より）

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 殺人 | 強盗 | 窃盗 | 強制性交等 |
| 米国 | 5.0 | 102.3 | 2,498.6 | 38.3 |
| 英国 | 1.0 | 81.0\* | 2,932.3\* | 48.8\* |
| フランス | 1.6 | 162.8 | 2,758.7 | 20.1 |
| ドイツ | 0.8 | 54.7 | 2,273.6 | 18.6 |
| 日本 | 0.3 | 1.9 | 427.5 | 0.9 |

\*英国については、2014年のデータ。

* + 1. **日本人の道徳意識**

長野は、ベネディクトの見解が間違っていることは、日本人の公衆道徳・倫理観にたいする意識の高さからも伺えると言う。長野はいくつかの事例を挙げる。

一つは、日本での小学生の電車通学である。これは外国人の指摘であるが、小学生が電車通学することなど治安の悪い外国では考えられないことである。特に地下鉄で小学生が通学していることは、驚きの目で見られている。比較的治安の良い外国でも地下鉄は治安の悪いところであり、小学生の地下鉄通学など思いもよらないことなのである。

二つ目は、銀行や両替所の窓口に防弾ガラスがないことである。外国では、防弾ガラスがあるのが普通である。これは銃器の普及に大きな違いがあることが一つの理由であるが、犯罪自体の少なさがそもそも防弾ガラスの必要を認識させないのであろう。

三つ目は、日本では街路に多くの自販機が設置されていて、それらが壊されていないことである。外国では街路に自販機が設置されていたらすぐに壊され、中にある現金や商品が持ち去られてしまう。自販機泥棒は、夜陰に乗じ人の目がないところでおこなわれるものであろう。この事例はまさに、日本では人の目がないところでも犯罪にたいする抑制が効いていることをものがたっている。

このように日本人の道徳意識・倫理意識が高いことは、犯罪の少なさに限ったことではない。たとえば、サッカー観戦後のゴミ拾いやタクシー運転手が客の忘れた財布を届けてくれたこと、あるいはクリーニングに出した衣類の中に忘れられていた現金がそのまま戻ってきたことなども外国人に驚きの目で見られている。

たしかに、日本人の道徳意識・倫理意識は、人の目のあるなしにかかわりなく、高いように思われる。やはり、ベネディクトの見解は、単純に過ぎたようである。

* + 1. **日本人の内面的抑制力としつけ**

それでは、日本における犯罪率の低さや道徳意識・倫理意識の高さは、どこから来るのだろうか。

これにたいする長野の回答は、日本人のしつけにあると言う。日本人には悪いことをしてはいけないという内面的強制力があり、その内面的強制力は子どもの頃からのしつけで養われたものであると言う。

日本では、子どもが悪いことをした場合、その子どもを押し入れ等に入れて、「なぜ怒られたのか考えなさい」と自分の心で「悪かった」と気づくように仕向けている。道徳の授業においても、「してはいけないこと」に自分で気づくことを重視している。これが、子どもの心に「悪いことをしてはいけない」という内面的強制力を植え付けているのである。

* + 1. **欧米人の罪の意識とキリスト教**

これにたいして欧米人の罪の意識は、神という外部からの命令に違反することを罪と感じる。これは、外部的な強制力である。欧米人のしつけにたいする考え方にも、キリスト教の影響が見える。たとえば、子どものしつけは、親が神の代理人として親が子どもに罰を与えることであり、親がしつけとして子どものお尻をたたくのは、神にかわって罰を与えているということだ。最近までのフランスの学校には、ムチが普通にあったそうである。先生が神の代理人として生徒に罰を加えるという考え方の象徴が、このムチなのだ。このように、欧米等のキリスト教諸国においては、悪いことをおこなわず、良いおこないを引きだすための力として、外部的強制力が重視されていると言える。

さらに、キリスト教には罪を帳消しにする懺悔という方法があり、そのうえ現代では欧米諸国においてキリスト教への信仰心が薄らいできている。つまり、自分の外部にあった神の存在が薄らいできている。その一方で、日本のしつけでは、依然として悪いことを自分で気づくことに重点が置かれている。これが、日本人の道徳意識・倫理意識の高さ、ひいては犯罪率の低さにつながっているようである。

* 1. **罪の外部性と恥の内面化－森三樹三郎の見解**
     1. **罪の意識と恥の意識の内面化**

森三樹三郎[[14]](#footnote-14)は、罪の文化であろうと恥の文化であろうと、罪の意識あるいは恥の意識が内面化されていることが重要であると言い、ベネディクトの見解を批判する。上記の長野晃子の見解と基本的に同じ主旨である。

ベネディクトは、キリスト教にもとづく罪の文化においては内面的な強制力が働き、人の目がないところでも悪事にたいする抑制力があると言う。つまり、神の教えに背くという良心の呵責におののき、悪事にたいする抑制が働くということである。しかしながら、ここで重要なのは、罪の意識がしつけや教育により内面化されていることだ。内面化されていれば、人の目がなくても悪事にたいして抑制が働く。恥の意識についても同様である。恥の意識が内面化されていれば、人の目がなくても悪事にたいして抑制が働くのである。

* + 1. **中国における名誉の文化**

森は、恥の文化は中国が本家であると言う。中国においては、伝統的に「名」を重んじる。「名」とは名誉であり、名誉を失うことは恥となる。恥をかけば、名誉を失うのである。このように、名誉と恥は裏表の関係にある。

中国においては、恥は内面的な強制力であり、罪は刑罰に象徴されるように外面的強制力であると考えられている。恥も学習により心に定着すれば内面的強制力になる。これにたいして、罪の意識は刑罰への恐れであり、外部からの強制力である。

1. **まとめ**
   1. **ベネディクトの見解について**

以上から、ベネディクトの見解について筆者の所感をまとめてみよう。

一つは、ベネディクトの見解は単純すぎるようだ。これは、長野晃子が言うように、日本における犯罪率の低さが示している。ベネディクトは日本人は人の目がないところでは悪事にたいする抑制が働きにくいと言うが、日本と諸外国の犯罪率のデータは逆のことを示している。

二つ目は、ベネディクトの見解は単純すぎるとは言え、全否定されるべきではないだろう。日本人が世間体という人の目を気にする傾向が強いのは否定できないように思われる。この意味においては、ベネディクトの見解は1946年当時のものとしては、卓見と言えるのではないだろうか。

三つ目は、ベネディクトの見解は、日本人学者を刺激し、その後の研究の発展に大いに寄与したことである。やはり、日本人には気付かなかったことに光をあてたことは、評価されるべきであろう。

* 1. **恥の文化と罪の文化**

ベネディクトの見解が単純すぎるならば、それでは日本の文化はどのような文化なのであろうか。上記で示されたさまざまな見解にもとづいて、筆者の考えを何点かにまとめてみよう。

一点目は、日本は世間の評価を気にする文化であると言えるのではないだろうか。すなわち、世間から非難されるような言動を慎む抑制がはたらくのである。世間からどう思われるかが、自己の行動基準となる。これは、子どもにたいして自分の事を「パパ」とか「お父さん」と呼称する他者依存の自己規定ということに通じているのであろう。

二点目は、日本は羞恥の文化であるとの指摘は、納得できるところがある。恥をかかないように言動を慎む傾向は、どの国にもそれほどの差はなくあるのではないだろうか。日本人だけが恥をかくことを極端に避ける傾向があるとは思えない。日本人に特徴的なのは、他人の注目を意識するだけで羞恥を感じてしまうことではないだろうか。したがって、日本人は世間の注目を怖がり、世間の注目を避けるように言動を慎むのである。これは、一点目の世間体を気にする文化につながっているのであろう。

三点目は、日本には罪の文化もあるということである。これは、仏教からの影響であり、したがってベネディクトが言うところのキリスト教における罪の文化とは別のものである。ベネディクトが言うところの罪の文化は、唯一絶対の神が罪を犯した人間を罰するということであり、人は神の罰を恐れて悪事を避けようとする文化である。その一方で仏教における罪の文化は、慈悲深い仏（阿弥陀如来や観音菩薩など）が罪深い人間を究極的には赦す文化である。この仏の赦しにたいする感謝の気持ちがあるからこそ、人間は良き人間として生きていかなければならないと自覚するのである。

* 1. **コンプライアンスへの示唆**
     1. **世間の評価と共生的罪悪感**

日本人が世間の評価を気にして自己の言動を慎む傾向が強いのであるならば、コンプライアンス違反防止においても世間の評価を意識させることが重要と言えるであろう。

また、日本人の罪悪感が共生的罪悪感であるならば、家族を意識させることも重要と言えるであろう。不正行為が発覚したときに、それが家族に多大な迷惑をかけることを意識させることである。

コンプライアンス教育において世間の評価を意識させること、および家族を意識させることを具体的にどのようにして各自の心に定着させていくかは、今後の研究課題としたい。

* + 1. **内在化**

コンプライアンス違反が起きるパターンとして、他者の監視やチェックがおろそかになった状況において、「見つからないから大丈夫だろう」と思い不正行為に手を染めることが多いのではないだろうか。これは、恥の文化であれ罪の文化であれ、同じであろう。たとえば、公金横領や手抜き工事、データ改ざんなどは、「見つからないから大丈夫だろう」を主な要因として起きると言えるのではないだろうか。

このようなコンプライアンス違反防止の対策としては、「やってはいけないことはしない」ということを一人ひとりの心の中に内在化させることが効果的である。もちろん、監視やチェックをきちんとおこなうことは、当然のことである。そのうえで、最後の防波堤として「やってはいけないことはしない」ということを心の中にしっかりと内在化させることは、重要であると思う。

この意味において、コンプライアンス教育は、この内在化ということに着目しておこなうことが必要である。それでは、内在化させるためにはどのようなコンプライアンス教育が効果的なのだろうか。この点については、今後の研究課題としたい。

以上

1. 本稿では、長谷川松治訳 講談社学術文庫（2005年5月）に依拠した。この長谷川による翻訳が1948年に日本で最初に発刊されたものである。なお、英文原本は米国にて1946年発刊された。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 作田啓一「恥の文化再考」（1967年9月、筑摩書房）。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 井上忠史「世間体の構造－社会心理史への試み」（講談社学術文庫、2007年12月、原本1977年）。 [↑](#footnote-ref-3)
4. ここで思うのは、心理学における「同調」という心理現象を考えた場合、日本人ほど同調しやすくかつ同調を重んじる人間はいないのかもしれない。 [↑](#footnote-ref-4)
5. # 鑪幹八郎「恥と意地―日本人の心理構造」(講談社現代新書、1998年1月)。

   [↑](#footnote-ref-5)
6. 1990年、日本で公開された。ちなみに、主演の妻役は、TVドラマ「奥さまは魔女」でサマンサを演じたエリザベス・モンゴメリーである。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 柳田國男「罪の文化と恥の文化（柳田國男全集31）」（筑摩書房、1991年2月、初出は「民族学研究」1950年5月）。 [↑](#footnote-ref-7)
8. 副田義也「日本文化試論－ベネディクト「菊と刀」を読む」（新曜社、1993年7月）。 [↑](#footnote-ref-8)
9. 俗謡とは民謡、小唄などの通俗的な歌のこと。 [↑](#footnote-ref-9)
10. 読みやすさのため、かなを漢字表記にしたり、旧字を新字にする等のことをしている。 [↑](#footnote-ref-10)
11. 大法輪閣、2014年6月。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 北山修・山下達久編著「罪の日本語臨床」（創元社、2009年5月）、および北山修・橋本雅之「日本人の〈原罪〉」（講談社現代新書、2009年1月）。 [↑](#footnote-ref-12)
13. 長野晃子「日本人はなぜいつも「申し訳ない」と思うのか」（草思社、2003年11月）。 [↑](#footnote-ref-13)
14. 森三樹三郎「「名」と「恥」の文化」（講談社学術文庫、2005年12月）。 [↑](#footnote-ref-14)